



令和4年度運営事業費研究事業（インハウス研究） 研究報告書

概要版

ケア現場における認知症対応力向上のための 支援ツール手引書の効果検証に関する研究

1. 背景と目的

介護保険サービス施設・事業所（以下：事業所）において、継続的に事業所における認知症ケアの質向上を果たすためには、職員自らが介護現場で抱えている様々な課題を抽出し、課題解決に向けて計画を立て、調査や取り組みを行い評価するという「研究活動」を実践していくことが重要である。しかし、教育的な背景や慢性的な人手不足の問題などから、ケア実践者が自ら研究活動を実践することは、ハードルが高く、誰もが実践できる状況になっていないのが現状である。認知症介護研究・研修大府センター（以下：大府センター）では、令和元年度より法人内連携プロジェクトを立ち上げ、介護現場における研究活動の支援を行っており、令和3年度には、ケア実践者が自ら研究活動を実践することが出来るよう、「職場の困りごと解決シート」（以下：支援ツール）を開発し、介護現場において研究活動を実践する上での有効性の検証を行った。その結果、用語の捉え方やツールの展開方法の難しさ等、支援ツールを活用していく上での課題が明らかになった。この結果を踏まえ、本研究では、支援ツールを有効的に活用してもらえらるための手引書を作成し、手引書を用いたことによる研究活動への効果について検証することを目的とした。

2. 手引書の有効性の検証（インタビュー調査）

支援ツールを活用して実際に研究活動を実践した研究協力者4名を対象に構造化インタビュー（①手引書活用の工夫・ポイント、②手引書を活用して良かった点、難しかった点、③手引書を有効的に活用してもらうために必要な取り組み）を実施し、支援ツールを活用する上での手引書の有効性と課題について検証を行なった。本調査は、社会福祉法人仁至会倫理・利益相反委員会の承認を経て実施している。

3. 調査結果

手引書の活用の工夫・ポイントについては、①取り組むスタッフが支援ツールを書けるように手引書の内容の確認をする、②支援ツールを集まって行えるよう取り組み日を設定するといった工夫が見られた。

手引書を活用して良かった点では、①手引書の内容が順序立てて考えるための指標になった、②進捗状況が確認できた、③取り組むスタッフが新たな視点で考えることできたといった点が挙げられていた。難しかった点では、①困りごとの原因を考えていく中で、利用者本人・家族の視点をどういう見方をすればよかったのかわからない、②研究活動をするイメージが持てない、③支援ツールを使うことが、認知症ケアの向上につながる意識できない、④評価することの大切さが手引書の内容ではわからないといった点が挙げられていた。

手引書を有効的に活用してもらうために必要な取り組みについては、①図や表を入れて、全体の目的や流れを想像しやすくする、②取り組みをすることの意図を明示し、支援ツールを使う目的を明確化すること、③目標をもってワークを実践できるよう、ワークの意義やねらいを示すこと、④目標をもって計画を組み立てることが出来るよう、計画のプロセスを明示する、⑤正確なアンケートに取り組むスタッフが中心となって作成できるよう、注意点等を記載するといった点が挙げられていた。

4. 考察

手引書を活用して支援ツールを用いた研究活動を実践することにより、物事に対して新しい視点を得るための基準になっていること、取り組みを進めていく上での評価基準になっていることから、手引書を活用することは一定の有効性があったといえる。今後、支援ツールを活用して研究活動を実践する上での手引書の有効性を高めていくためには、①研究活動を実践することが特別なものではなく、日常の認知症ケアを実践している中で起こっている活動という認識を持ってもらう働きかけ、②支援ツールの目的や各ワークのねらいなどを明記し、目標をもって取り組みを実践することが出来る働きかけ、③文字だけではなく図表などを活用し、視覚からイメージすることが出来る働きかけを、手引書を通じて行っていくことが必要であるといえる。

5. まとめ

認知症ケア実践現場では、人手不足などの様々な問題に直面しながらも、ケアの質向上を図り、質の高いケアを実践していくことが求められている。そのためにも、研究的視点をもって課題解決に向けて取り組むことは大きな意義がある。ケア実践現場において支援ツールが活用してもらえらるよう、研究事業で明らかになった点を踏まえ、手引書がより有効的なものになるよう今後も検討を重ねていく。